洋画家　佐伯　祐三

佐伯祐三（さえきゆうぞう）は、近代日本を代表する洋画家の一人です。彼は一八九八（明治三一）年に大阪で生まれました。高校卒業後、一九一七（大正六）年東京の小石川にあった川端画学校に入りました。大正七年、東京美術学校（東京藝術大学）西洋画科に入学し、絵の勉強をしました。美術学校では、卒業のときに自画像を描いて学校に寄付する習わしでした。そのとき祐三の描いた自画像は、鋭い眼が印象的で、作風は印象派の穏やかなものでした。

祐三の自画像

新宿区立佐伯祐三
アトリエ記念館

彼は、下落合の静かな木立の中に白い小さなアトリエと住まいを築きました。そこでたくさんの絵を描きました。祐三が下落合で生活し、絵を描いたのは、まず大正十年から一二年、そして、大正一五年から昭和二年までの計四年余りでした。

祐三は、絵の勉強をするために大正十二年、家族とともにフランスへ渡りました。第一回めのパリ滞在は一九二四（大正一三）年一月から一九二六年一月まで、約二年間でした。

フランスでの初夏、祐三はパリ郊外のオーヴェール・シュル・オワーズ（ゴッホ終焉の地）に、フォーヴィズム(野獣派)の巨匠ヴラマンクを訪ねました。彼は持参した自作『裸婦』の絵を見せたところ、ヴラマンクに「このアカデミックめ」（人の受け売りの絵だ）と叱責され、強いショックを受けました。だれしも、人は何かを始めるときは他人のまね（学び）から始めます。祐三は、すでに自分なりの絵を描いているという自信があったので、大きな衝撃を受けたのです。

その後、彼の画風は変化し始めました。彼は、ヴラマンクから教えを受けたり、研究に没頭したりしました。セザンヌ調の絵柄から逃れるように、これでもかこれでもかと、必死に作品を制作しました。彼は自分の心情を表現できるものを探してパリ市の内外をさまよいました。やがて、彼が見つけたのは、パリの古い街並み、パリ庶民の生活でした。

祐三の作品の多くは、パリの街角風景を描いたものです。それらの絵にはヴラマンクとユトリロの影響がみられますが、その後、彼は独特の風景画を創りあげていきました。一九二五年の秋、サロン・ドートンヌに入選し、祐三の作品は世に認められるようになりました。

一九二六（大正一五・昭和元）年、祐三は、健康を回復するために帰国しました。昭和二年までの約二年間、パリで得た描写法を日本の風景に当てはめ、自分の画風を確立することに全精力を注ぎました。彼は短期間に、有名な「下落合風景」（約四〇点以上の連作）を描きました。

短い一時帰国の後、一九二七年、再びパリに戻りました。祐三は、半年余りの間に魂の底からふき上がる内面的な作品をたくさん描きあげました。ポスターの文字が躍る街頭風景やカフェテラス。そして、人間の真実を見据えるような人々の肖像。さらにパリ郊外の田園風景など。すべてが、激しい絵筆で描かれ、絵の中に彼の**真実**がありました。

しかし、厳しい制作で体調をくずし、持病の結核が悪化し、精神面でも不安定となりました。ある日、彼は自殺未遂を図り、ヴィル・エヴラール精神病院に入院しました。彼は、一切の食事を拒み、同年八月一六日に衰弱死しました。

わずか三〇年の短い生涯でしたが、彼の芸術は、今日、ますます高く評価されています。

〈わたしたちは、佐伯祐三から何を学ぶか？〉

◎　一つ、向上心（より高い目標に向かって、やりぬく心をもつ。）
◎　二つ、個性伸長（自分の特徴を知り、よい所を積極的に伸ばす。）
◎　三つ、創意工夫（真理を大切にし、進んで新しいものを求め、工夫してよりよくする。）

○　私が（芹沢光治良・作家）、彼（祐三）の風景を宗教画よりも宗教的だと言ったことに喜んで、その後は無口なのに、絵画についてよく語った。帰国のせまったある夜、佐伯君はまるめてアトリエの隅においてあったたくさんのカンバスを、一枚一枚ひろげて見せて、「僕もこんな無駄な勉強をしましたよ、外光派にとらわれたり、ルノワールに迫ろうと努力したり、その時の遺骸のようなものでみんなすてて帰ろうと思うが・・・僕はヴラマンクに会って、絵画に開眼したが、それからゴッホ（一八九〇没）を発見しました。ゴッホを師匠にしたから、東洋の宗教画を見るために、日本に帰る決心がついたけれど・・・日本の古い絵画を見てないですからね・・・見たらできるだけ早くパリにもどって、自分の絵を描きますよ。」（芹沢光治良「こころの旅」新潮社より）

1926 年下落合風景（和歌山県立近代美術館蔵）
夕暮れの情景。左手に点灯した街路灯、向こうに変圧器がのった高めの電柱、犬を連れた散歩の人などが描かれています

下落合風景（落合第一小学校・暦博蔵）
1923 年に造成された目白第二文化村南端にあったテニスコート。日本家屋は昔からの住まい。この作品は遠くを先に、近くを後に描いています。

○　彼の作品にはパリの街角、店先などを独特の荒々しいタッチで描いたものが多く、見る人に強い印象を与えます。彼の風景画にはモチーフとして「文字」が多く、街角のポスター、看板等の文字を「造形要素の一部」として取り入れている点が特色だといわれています。

作品の多くは都市風景ですが、人物画、静物画等もあります。晩年の佐伯の絵は、人の気配をほとんど感じさせない静謐なものになったと評価されています。

（現在、祐三の作品は「大阪市立近代美術館」五〇点、「和歌山県立近代美術館」一四点など、全国三四ヵ所に所蔵されています。）

1928年　郵便配達夫
（大阪市立近代美術館蔵）
老人の見開かれた眼には祐三の生に対する叫びが込められているようです。

1927年　ガス灯と広告　（東京国立近代美術館所蔵）
佐伯作品では最大のカンヴァスに描かれています。
祐三のパリ・イメージを特徴づけた作品です。

1928年　ロシアの少女
（大阪市立近代美術館蔵）
革命をのがれロシアから亡命してきた貴族の娘で、祐三に「悲しみは重なるもの」と暗示的な言葉を残しました。

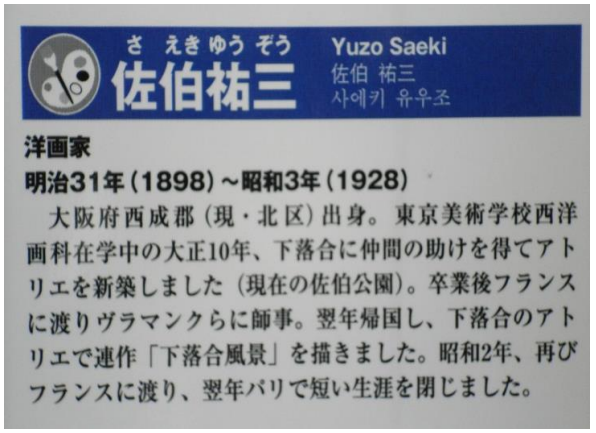
1928年　カフェ・レストラン（大阪市立近代美術館蔵）
祐三は「僕は絵を描いていて線を引く時、もう何んにも考えずに眼をつぶってサッと引くと、いい線が引ける」と言っています。

○ 祐三が巨匠ヴラマンクに絵を見せた時に、「アカデミック！」と一喝されました（とても有名な逸話です）。そこから彼の闘いが始まり、彼独特の個性的で優れた画風が確立されていきました。

祐三はショックを受けましたが、アカデミックは悪いものでしょうか？　学問として芸術を学ぶと多少の弊害はあるでしょうが、芸術は個人の美意識の問題です。アカデミズムの中にも真・善・美・正義・個性などがもちろんあります。印象派も革新的な絵画も、アカデミズム絵画も、「美」を何よりも求めていました。何を「美」と信じるかが異なっていただけでしょう。今の私たちには、幸いなことにそれぞれの絵画を美しいと思う自由があります。甲乙ともに美しい。甲が美しく乙はそうではない。甲も乙もどちらも美しくないと思ってもいいわけです。美の鑑賞は、まったく自由ですから。

○ 新宿区立佐伯祐三アトリエ記念館

アトリエ全景（平成 22 年整備）

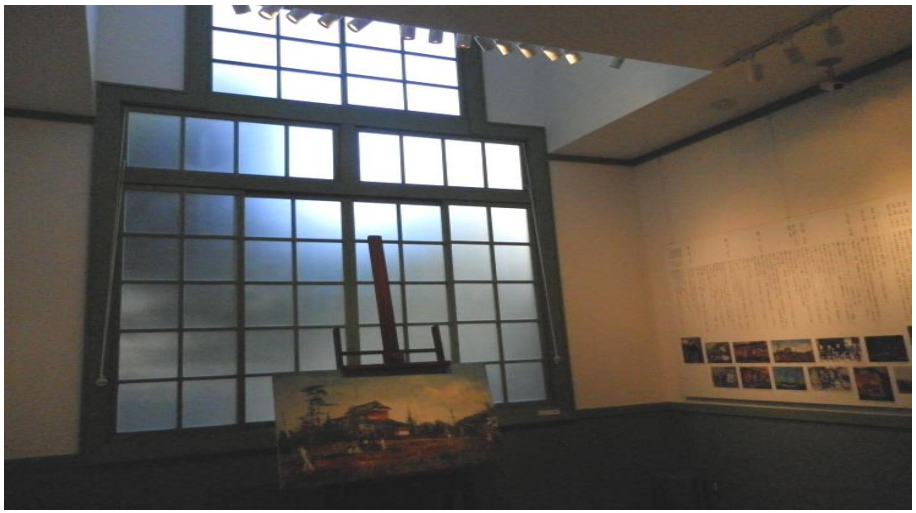


復元模型（右下がアトリエ）
左上側が母屋です。

館内では、ＤＶＤを使って説明が流れています。

アトリエと母屋の平面図(左１階・右２階)

アトリエ内部の様子　2



アトリエ内部の様子　1

下落合風景

祐三の生涯（年譜）

ミニギャラリー（管理棟）

祐三のライフマスク

1971(昭和 46)年『時計台の見える石段』昭和 47 年『百花園蓮池』絶筆

◎佐伯祐三アトリエ記念館では、土曜日・日曜日・祝日の午前、午後に新宿歴史博物館・学芸課のボランティアの方が説明をしてくれます。団体の場合は、平日も可能です。ご希望の学校は、歴博まで連絡してください。

佐伯米子作「エリカの花」

背景のガラス窓越しに描かれている建物は、建て替え前の聖母病院です。

祐三を支えた　佐伯米子について

さえき　よねこ(1897 年～1972 年)は、大正-昭和時代の洋画家です。

東京府東京市（現東京都中央区銀座）出身。東京女学館卒。

川合玉堂に日本画を学びました。

1920 年佐伯祐三と結婚。

1923 年に夫とフランスに渡り、ヴラマンクに師事。

「アルルのはね橋」がサロン・ドートンヌに入選しました。

1926 年帰国し、二科展に出品。

1927 年再び渡仏。1928 年 8 月、夫祐三と娘がフランスで相次いで死去。

1928 年 10 月帰国。

1946 年三岸節子らと女流画家協会を創立。

第 21 回二紀展文部大臣奨励賞を受賞しました。